

勝林寺寺報

観見諸佛淨土圖

近頃は出石の町にもいろいろな国の人たちが観光に来られます。勝林寺にも時々入ってこられ、本堂の中を案内したりすると大変喜ばれます。(時々土足のまま本堂前から上がる方が困りますが...)この国の自然と文化と人柄が国際的に注目され、他の国の人々から魅力を感じられているようです。

お釈迦様がインドで説かれた仏教が日本に伝わるのに一千年の時がかかるつたことを思うと、本当に人間の文明は発達しました。行き来することも速く容易になりましたし、インターネットを使えば隣の家人と話しているように地球の裏側の人とも話ができます。地球全体が一つになつたようにも思えるのですが、それでも世界には一九六もの国があるのです。国が違えば事情も違います。来る日も来る日もテレビのニュースでは平和なこの国では考えられないような国と国との闘い、争い、醜い罵り合い、おびただしい数の人が傷つけ合い、憎しみあい、奪い合い、病み、飢えて死んでいくている様子が映し出されます。同じ一つの地球上の出来事とは思えません。それとは逆に最近のテレビ、特にBSにはいろんな国のかっこいい風景や人々を取材した、ほのぼのとした番組が多くなった気がします。特に“世界ネコ歩き”は毎



国にも同じようにネコが暮らしていて、自然のしさは、国の境を越えて心を和ませてくれます。イギリスの国で生まれたジョンレノンがビートルズ解散の後に歌ったイメージは、まるで日本

お知らせ

二〇年度の勝林寺がスタート！
一月二〇日に開催されました代議員会で、三〇年度の勝林寺行事予定並びに予算が承認されましたので、主な行事の予定をお知らせいたします。

一月一三日 総代会
一一〇日 代議員会

二月三日 仏壯総会
三月二一日 春彼岸会
五月五日 花祭り

四月一四日 観桜会
五月五日 合同役員会

六月一六・一七日 納骨研修旅行
一二三日 全国子ども落語大会予選(会場)
三〇日 おみがき奉仕

七月八・九日 永代経
八月八日 全戦没者追悼法要

九月二三日 秋彼岸会
一九日 仏婦・子ども研修会
前住職初盆

一〇月六日 前住職一周忌法要
一一〇日 敬老報恩講

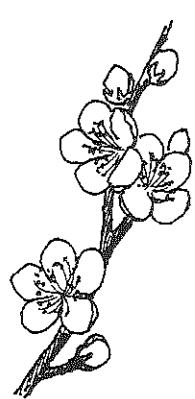
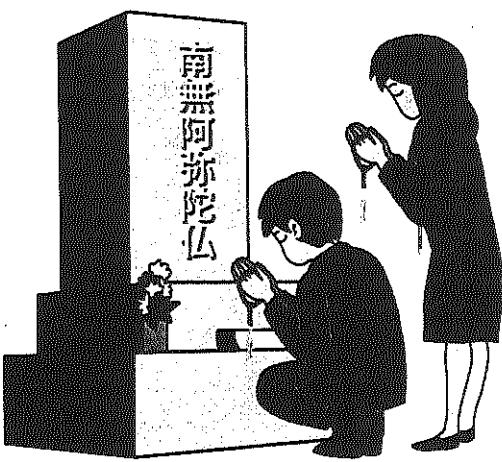
九月二三日 合同役員会
秋彼岸会
一九日 仏婦・子ども研修会
前住職初盆

一〇月六日 前住職一周忌法要
一一〇日 敬老報恩講
一二月二一・二二日 報恩講

二月二〇日 餅つき
三一日 除夜会

ぜひ、勝林寺にお参りください
お待ちしております

(敬称略)



お念佛が世界に広がる

阿弥陀様の教えが説かれている「無量寿經」という教典は、今日の研究によりますと、およそ紀元一世紀のころ、インドの北西地域において生まれたものといわれています。インドにおいては古くから、そしてその当時においても、きびしい封建体制がつづいて、人間の上下の階級差別はまことにきびしいものがありました。そしてまた、この地域には、東西の各地から、さまざまな人種、民族があつまつて、多様な人々が住んでいました。したがって、その人々の皮膚の色も、白、黒、黄と分かれ、そのことから、人種、民族の間における人間差別も生まれていたようです。

この「無量寿經」の中で、私たちの人間世界の、あるべきまことの世界として極楽浄土について、そこに住む人々の姿、その姿形は、美しいとか、みにくいとかいう差別はなくして、すべてが平等に端麗であり、それはひとしく金色にかがやいています。私たちの願うべき世界としての浄土とは、そういう絶対平等の世界だということです。

私は今年の二月に、アメリカの仏教界に招かれてサンフランシスコにまいりました。そして真宗僧侶の方々の勉強会に参加し、また多くの真宗信者の方々に、いろいろと真宗の教えについてお話をいたしました。そこで感じたことは、アメリカの真宗教団は、かつての日系人ばかりの単純な組織ではなくなって、アメリカ人のほかに、南アメリカのスペイン系の人々、東南アジアのフィリピン系の人々、そしてまた黒人の人たちの真宗信者の集まりとして、はなやかな国際性を持つた教団になつていているということです。

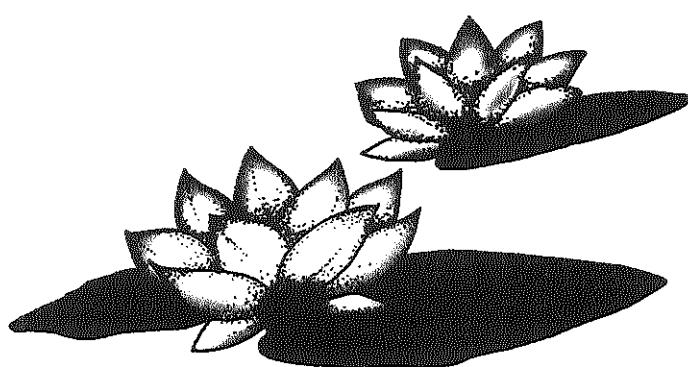
す。そこでは人種、民族の相違を超えて、みんながお念佛一つに結ばれているのです。まさしく「無量寿經」に説かれていたところの、淨土の相状のように、みんなが阿弥陀仏の光明に照らされて、金色に輝いているわけです。私はここに、真宗念佛の未来をかいしま見たように思えて、とてもうれしく、たのもしく感じたことがあります。

また最近では、先年私が書いた「真宗の大意」という本が、英語に翻訳、出版されて、アメリカやヨーロッパで売られています。また昨年暮れには私が二十年ほど前に書いた本が、ドイツ語に翻訳されて売り出されるということを、ようよう自覚したいものです。

親鸞様のお念佛の教えが、いまでは世界の人々によって求められ、読まれるようになつてきました。私たちは、そういう世界的な大きな流れの中で、真宗を学んでいるということを、救う、我に任せよ」と願われたお心が如来の呼び声となり、その声をそのまま聴くことで、私たちの信心となります。親鸞聖人は、平生に眞実信心を獲た時に、往生成仏に必要な事柄が衆生のところですべて満足する、と理解されます。阿弥陀様の信心を獲た人は、平生に阿弥陀様の光明におさめ取られ護られていますので、間違いなく往生成仏することにさだまつており、捨てられることがあります。臨終時に初めて信を獲る人もいるかもしれません、病苦などに苛まれて、なかなか正しくみ教えを正受できるものではありません。「仏法は若い時にたしなめ」ともいわれますが、日頃の聴聞が大切な所です。

(2005・5)

(信樂峻磨遺稿法語集より引用)



法語カレンダー（二月のことば）
信心のゆだねぬなり

どん

前住職の姿のない新年を迎えるました。

家のあちこちにわざかな隙間を感じ、寂しさはありますが、いつものよう(?)門徒の皆さんと一緒に、新しい年を迎えた喜びをお祝いし、勝林寺のスタートを無事に切ることが出来たことをとてもうれしく思います。

実をいうと、新年を迎える時期が近づくにつれて、周囲の皆さんがいろいろ気遣いをしてくださるのがじわじわ伝わってきました。前住職が亡くなつて三ヶ月もたつていない時期だったからでしょう。「新年のご挨拶に行つてもよいのだろうか?」「おめでとうござりますって言つてもいいのだろうか?」「年賀状を出してもいいのだろうか?」・・・いつもは、当たり前にしていたことが、「家族の死」を迎えることにより当たり前ではなくなりかけていました。しかし、勝林寺のご門徒さんは、ちゃんと阿弥陀様の思い、前住職の思い、私たち寺族の思いを理解していくくださいました。いつものように、阿弥陀様に手を合わせることから新年をスタートさせてくださいました。ありがたいことです。

世間で言われる「喪に服する」という慣習の根底には、「死は穢れ(けがれ)」というとらえ方があります。その穢れを周囲に移さないよう行動を慎む期間(ウイキペディア)を指すようです。また、つましくしていないと家族の死を悲しんでいないと周囲からみられる不安もあるのでしょうか。死が穢れでないことを最もよく理解している真宗門徒の私たちでも、簡単に理解してしまった「慣習」の脅威です。慣習に流されず、すべていつも通りに過ごした勝林寺の新年ですが、一つだけ違うことがあります。それは、年賀状を出さなかつたことです。実はこれ、慣習に便乗して横着しました。すみません。この紙面をお借りして「今年もよろしくお願いします」(笑)

(文責 坊守)